

第2章 京都大学本部構内 AX28 区の発掘調査

五十川 伸矢

1 調査の経過

昭和53年、工学部イオン工学実験施設および電気工学研究室等の新営工事が計画されたため、電気系教室の敷地内に4ヶ所の試掘坑を設けて、遺跡確認のための試掘調査をおこなった。この試掘調査の結果、建物新営予定地の発掘調査を2期にわけて実施することになり、昭和53年度にイオン工学実験施設にあたる敷地(AW28区)の調査をおこなった。この調査では厚い表土層の下に埋没していた道路遺構を確認し、それが江戸時代の白川道であることが明らかになった〔岡田・吉野80 pp. 21-30〕。今回の昭和55年度の調査は、これにつづく第2期のもので、第1期の東側に隣接する地域が調査対象となった(図版1-90)。調査面積は1100㎡。発掘調査は、7月に開始し11月に終了した。なお、昭和55年度調査区の西側に隣接する地域にオイルタンクを付設することになったため、昭和56年度に追加調査をおこなった(図版1-110)。これも、あわせて報告する。

2 層位

調査区は、吉田山西麓にほど近く、北白川扇状地上に位置する。現地表の標高は、北端で60.4m、南端で59.4mを示し、北から南に緩やかに傾斜する。調査区の層位は、基本的にはAW28区のそれと、ほぼ軌を一にしている。層位の状況は北東から南西にはしる道路SF1(近世白川道)をはさんで、北と南でかなり異なった堆積を示す(図2)。

まず、北半では、上から表土(第1層)、暗灰色土(第3層)、赤褐色土(第10層)、茶褐色土(第12層)、黄砂(第13層)、白砂(第14層)、黄灰色シルト(第15層)の順に堆積がみられる。これは、京都大学本部構内における基本的な堆積序列をなしている。暗灰色土は、近世以降の耕土で遺物は少量である。赤褐色土は、中世京都I期ごろの遺物を含むが、茶褐色土以下は無遺物である。調査区東南域へ広がる黄砂混り黒褐色土(第11層)は、黄灰色シルト上面より上に堆積し、砂取り穴の埋土と考えられる。

次に、南半では、表土(第1層)、黄灰色砂質土(第2層)、暗灰色粘質土(第6層)、黄褐色土(第7層)、灰褐色土(第8層)、灰褐色粘質土(第9層)、黄砂(第13層)、白砂(第14層)、黄灰色シルト(第15層)の順に堆積がみられる。また、溝SD18周辺には、比較的緩やかな流水によって堆積したと考える黄灰色細砂(第4層)、青灰色細砂(第5層)が存在する。これらのうち、黄灰色砂質土は、明治時代の堆積である。暗灰色粘質土上面では、幅0.4m

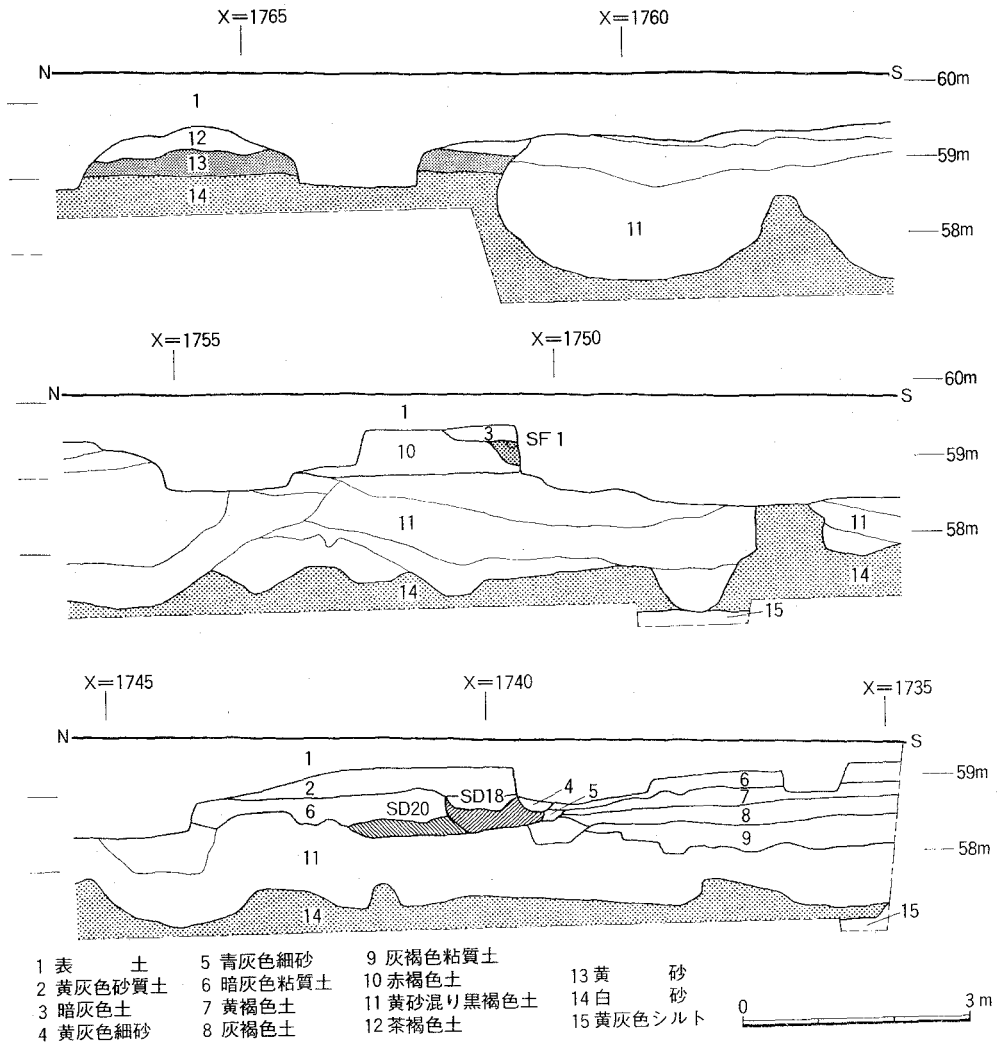


図2 調査区中央南北畔西壁の層位 縮尺 1/100

の畦畔を検出しており、暗灰色粘質土は、近世の水田耕土と推定できる。黄褐色土、灰褐色土は、中世末から近世にかけての畑土で、黄褐色土上面では、溝SD20に平行する柵列を検出した。溝SD20と道路SF1の間では、暗灰色粘質土の下に黄砂が存在し、その上面は、緩やかに北から南へ傾斜している。溝SD20以南の黄砂、黄砂混り黒褐色土の上面は、堅くしまり、赤褐色を呈するところがある。また、この面と灰褐色粘質土の間には、薄い砂礫層が散在し、河川の氾濫にみまわれた状態を示すが、これは、AW28区でも検出している。

3 遺構と遺物

本調査区で検出した遺構には、道路、溝、杭列、柵、野壺などからなる近世の遺構群と、掘立柱建物、井戸、土器溜、土坑などからなる中世の遺構群がある。そこで、近世、中世の順に、検出した遺構と出土遺物について述べ、さらに弥生時代の遺物の説明をおこなう。

(1) 近世の遺構・遺物

調査区北半には、明確な近世の遺構を確認しておらず、一帯は畑であったと考えられる。南半には、近世白川道と沿道の溝、柵、野壺などの遺構を検出した(図版2-1, 図3)。

道路SF1(図版3, 図3・4) 昭和53年度にAW28区で検出した近世白川道の東への連続部分である。道路SF1は、北に高く、南に低い緩やかな傾斜地を、北側に崖面を造って切通し、路面を造成している。路面は、小礫を混じえた土砂もしくは黒褐色粘質土を堅くたたきしめたような状況を示し、I~Vの5枚を数えることができる。また、路面南端が、SF1-II以降、0.3mほど南へ移動していることが注目される。路面のうち、SF1-I・IIには、幅20cm、深さ

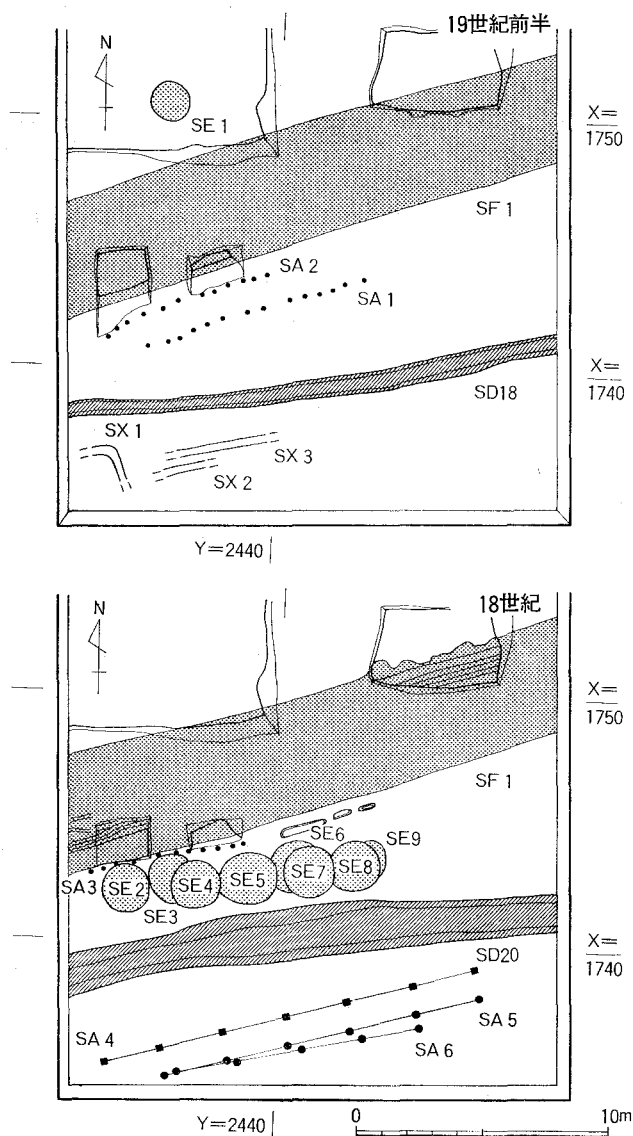


図3 近世の遺構 縮尺1/300

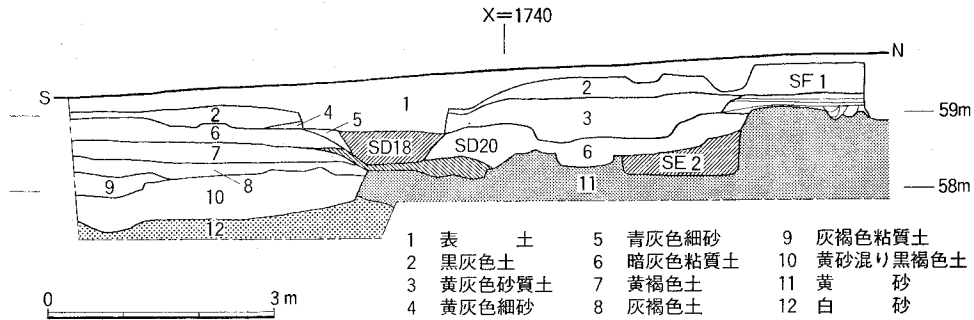


図4 道路SF1周辺の層位 縮尺1/100

20cmの轍がともなり。ちなみに、AW28区検出の道路SF1においては、9対の轍がみられ、両轍の間隔が1.2mであることが判明している。轍は、切合い関係から、北から南へと移動していることがわかり、路面南端の移動と考え合せるならば、道路全体が南遷したといえるだろう。路面北端の崖下には、幅30cm、深さ50cmの側溝を検出したが、これは路面の南遷によって土砂が埋積している。

溝SD18・SD20(図版3, 図3・4) ともに、道路SF1の南を平行してはしる。SD18は、幅1.4m、深さ0.4mで、暗灰色粘質土の上面で検出した。埋土は砂礫からなる。SD20は、幅2.0m、深さ0.3mで、暗灰色粘質土を除去した段階で検出した。南側の溝肩には、花崗岩製の石仏を据えている。SD18と同様、埋土は砂礫である。両溝の埋土から大量の陶磁器などが出土した(図版5, 図5)。

I1は土師器皿。I2は陶器灯明皿。内面に灰黄色の釉がかかる。I3は京焼の皿で、梅花文を描く。I4・I6は、くらわんか手の染付皿・碗。I5は染付半筒型碗。I7はべいとう乗燈。茶褐色の釉がかかる。I8は染付ぶつしょうく仏餉具。I9は陶器燈明皿。I10・I11は染付皿。I11には清水六兵衛の「清」押印がみえる。I12・I13は染付碗。I13は「道八」の銘をもつ。I14は徳利、I15は乗燈。ともに茶褐色の釉がかかる。I16は備前産すり鉢である。

杭列SA1～SA3(図版3-1, 図3) 道路SF1と溝SD18との間で、これらとほぼ平行にならぶ杭列である。柱間寸法は40～50cmである。SA1・SA2は、暗灰色粘質土から掘込んだもので、層的にみてSA1のほうが新しいと判断した。SA3は、黄砂上面で検出した。これらは、傾斜地に造成された道路SF1の路肩を保護し、南側の溝SD18・SD20の流水による侵食を防止するためのものであろう。

柵SA4～SA6(図版2-1, 図3) 溝SD20の南側に、これと平行してならぶ柵である。柱間寸法は約2.5mである。いずれも黄褐色土上面で検出した。SA4の柱掘形

は隅丸方形，SA5・SA6は円形をなす。これらは畑作にともなうものであろう。

野壺SE1～SE9(図版3-2, 図3) 道路SF1の沿道に，9基の野壺を検出した。掘形は1.6～2.0mの円形で，深さは検出面から0.6m程度である。このうちSE1は，SF1の北側に位置し，暗灰色土上面で検出した。漆喰製の枠をもつ唯一のものである。SE2～SE9は，SF1の南側に位置し，暗灰色粘質土を除去した段階で検出した。互いに切合っており，切合い関係を検討すると，同時に3基程度存在した可能性がある。このうちSE2・SE4では，掘形の底部に桶の枠板と棧の痕跡を残しており，木製の桶を据えつけていたと推定できる。SE3・SE5～SE9も同様の構造とみてよいだらう。

畦畔SX1～SX3(図3) 溝SD18の南側の暗灰色粘質土上面で検出した。その幅は0.4m，残存高は数cmである。SX1はL字状に折曲り，水田の境界を推定できる。

以上の近世の遺構は，検出した層位や出土遺物から，時期を異にする2群に分けることができる(図3)。このうち，古い1群は，道路SF1-I，溝SD20，野壺SE2～SE9，杭列SA3，柵SA4～SA6である。また，新しい1群は，道路SF1-II～V，溝SD18，野壺SE1，杭列SA1・SA2，畦畔SX1～SX3である。これらは，溝

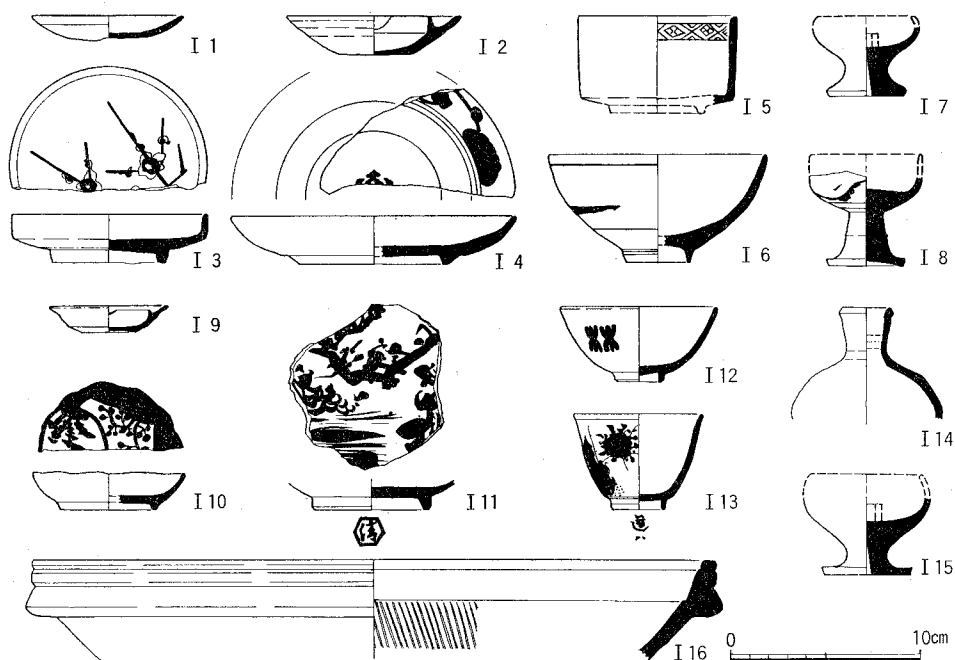


図5 SD20出土遺物(I1土師器, I2・I3・I7陶器, I4～I6・I8染付), SD18出土遺物(I9・I14～I16陶器, I10～I13染付)

S D20・S D18の出土遺物から、前者が18世紀ごろ、後者が19世紀前半ごろと考える。

(3) 中世の遺構・遺物(図版2-2)

建物S B I(図版4-1, 図6) 調査区の北東の壁ぎわに、柱穴を3個検出した。柱あたりは確認していないが、柱間は2.0m, 東側へ掘りなおした形跡がある。方位は、ほぼ真北方位を示す。南または北に続く柱穴がなく調査区の東にのびる掘立柱建物であろう。

道路S F 2(図6) 近世の溝S D20以南の黄砂上面もしくは黄砂混り黒褐色土上面は、やや赤褐色を帯びた堅い面をなしている。明確な側溝、轍などを検出していないが、あるいは中世にさかのぼる道路遺構の可能性はある。

井戸S E62(図版4-2, 図6) 調査区北端の壁ぎわで、一辺1.7mの隅丸方形の掘形をもつ井戸S E62を検出した。側壁崩落の危険が高いため、現地表下6mまでで掘削を中止し、底には至っていない。このため、井戸側の保護方法、水溜めの構造は不明である。埋土から、中世京都I期ごろの土師器とともに軒瓦が出土した(図8)。I40は珠文を配する巴文軒丸瓦。I41は剣頭文軒平瓦。I42は扁行唐草文軒平瓦。I41・I42ともに折り曲げ造りで、瓦当面と凹面との境を斜めに篋で削る。I44は波文軒平瓦で、瓦当面に布目痕が残り、折り曲げ造りであることが明瞭である。12世紀末から13世紀にわたるものと考えてよいだろう。

土器溜S K51(図版4-3, 図6) 調査区西辺で検出したS K51は、大規模な土器溜で、東西7m, 南北5mの不整形の掘形を示し、深さは1.5mである。一部を不定形土坑に切られている。これから、整理箱40箱分の遺物が出土した。出土遺物は土師器皿・碗が圧倒的に多く、東高西低の傾きをとる状態で検出したものが多い。そのほかに、瓦器、須恵器、陶磁器などが出土した。これらは、中世京都I期中段階の良好な一括資料と考えられる(図版6, 図7・8)。

I17~I20・I25・I26は赤褐色を呈する土師器皿。すべてI段撫で面取り手法D₅類口径は大型皿は13cm, 小型皿は9cmのものが多数を占める。I21~I24・I28・I29は灰白色を呈する土師器碗。大型碗はD₄類, 小型碗はD₅類である。口径は大型, 小型それぞれ13cm, 9cmを示すものが多い。I27・I30は土師器受皿。I27は赤褐色, I30は灰白色を呈する。I31は灰白色の土師器高杯。杯部と軸部の境は肥厚して、あまい稜をもつ。軸下半部に縦方向の篋削りを施し、13面の面取りをなす。I32・I33は瓦器碗。I32は口径が14cmで内面に連結輪状、螺旋状の暗文を施す。口縁端内面には沈線をもつ。橋本久和のいうⅢ-2にあたるものである[橋本80p.90]。I33は口径9cmの小型碗で、篋によって5弁

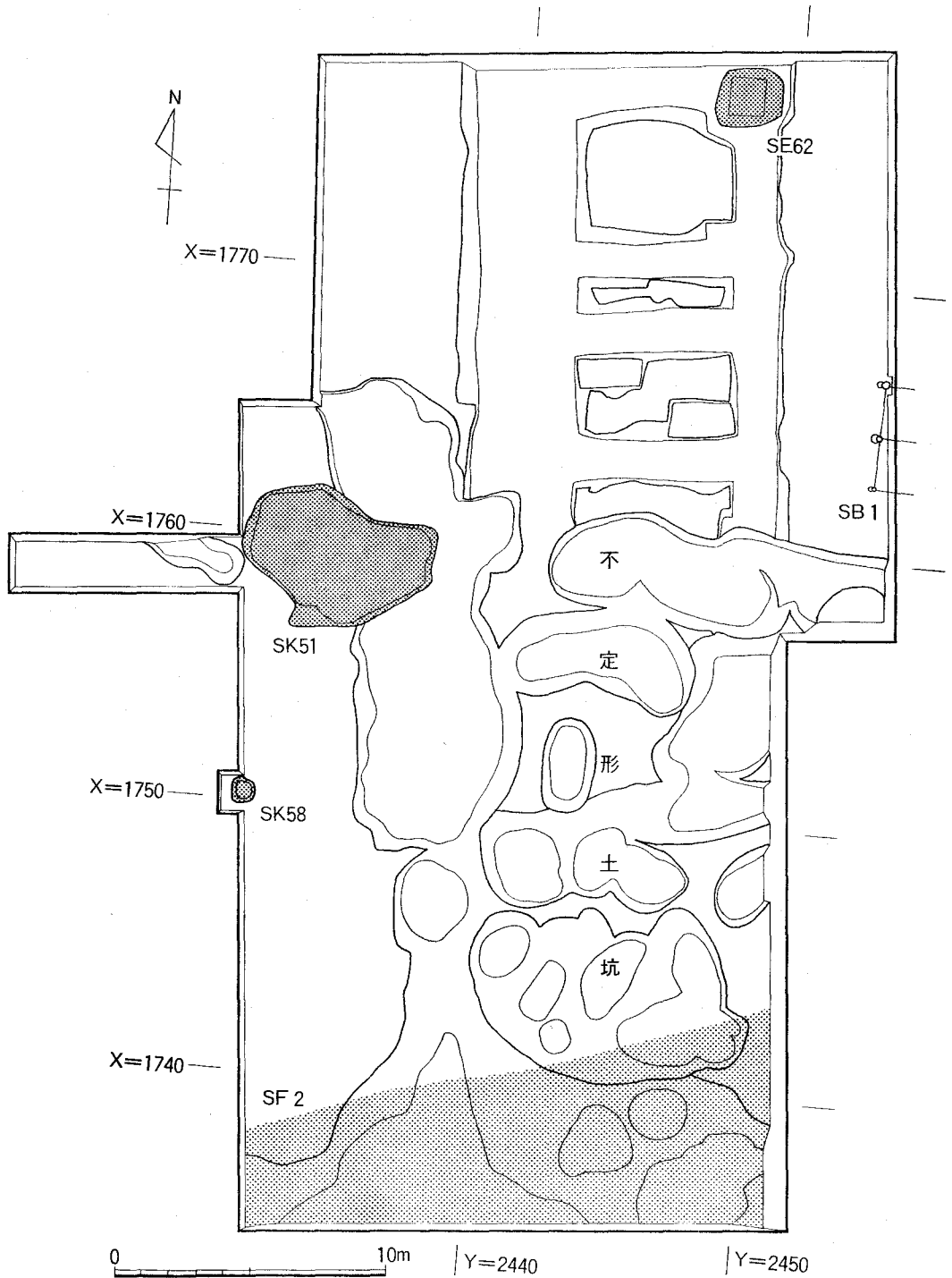


図6 中世の遺構 縮尺1/250

の輪花状に形成している。見込みに菊花状の暗文を施す。I 34は 龍泉窯系劃花鎗蓮弁文碗。口径14cmで釉調は灰青色を呈する。横田賢次郎・森田勉のいう龍泉窯系青磁碗 I-5 にあたる〔横田・森田78p.13〕。I 35は青磁合子蓋。印刻の草花文をもち、釉調は緑青色を呈する。I 36は土師器鉢。口縁は大きく外方に開き、内外面に粘土紐の継ぎ目を残す。一般に塩壺といわれているものである。I 37は須恵器すり鉢。宇野隆夫のいう、すり鉢4類にあたる〔宇野81 p.78〕。I 38は瓦器盤で、口縁端部が丸味をもち、端部が内側に肥厚す

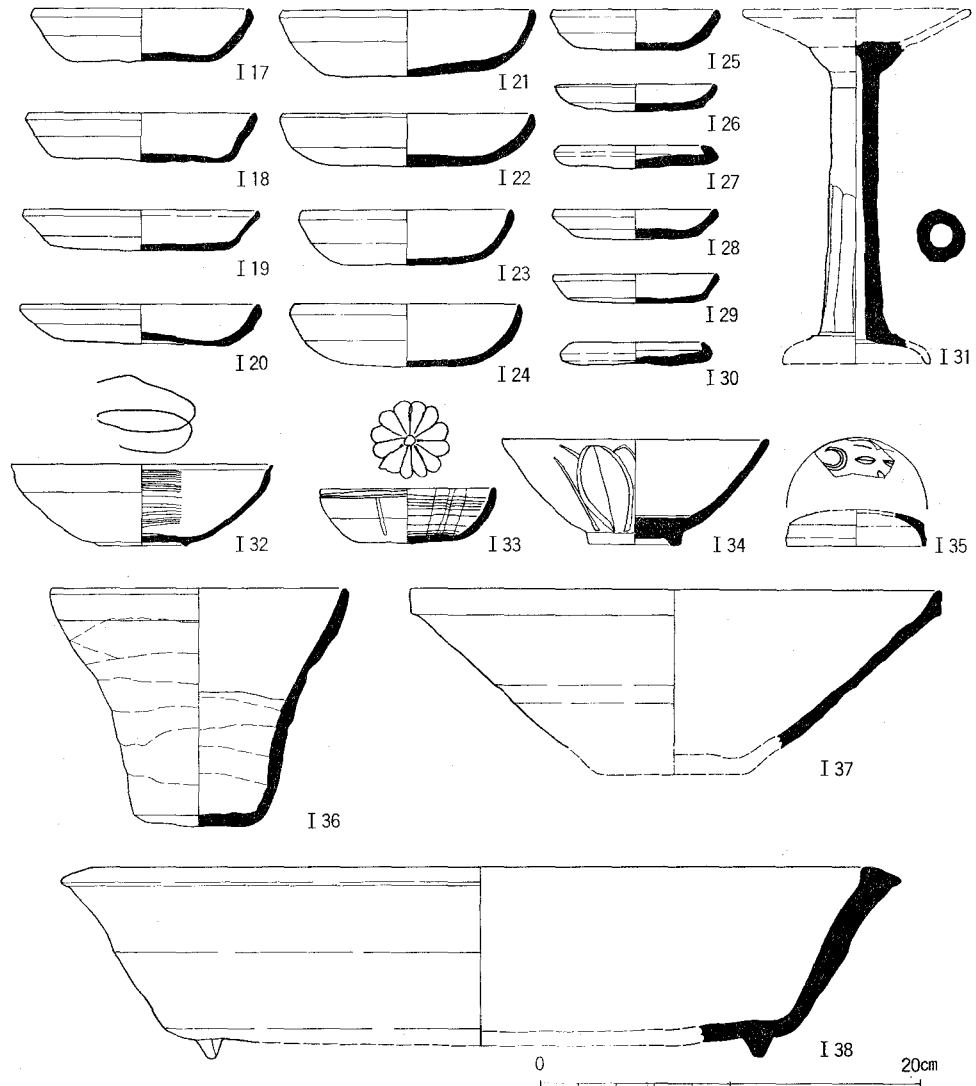


図7 S K51出土遺物 (I 17~I 31・I 35土師器, I 32・I 33・I 38瓦器, I 34・I 35青磁, I 37須恵器)

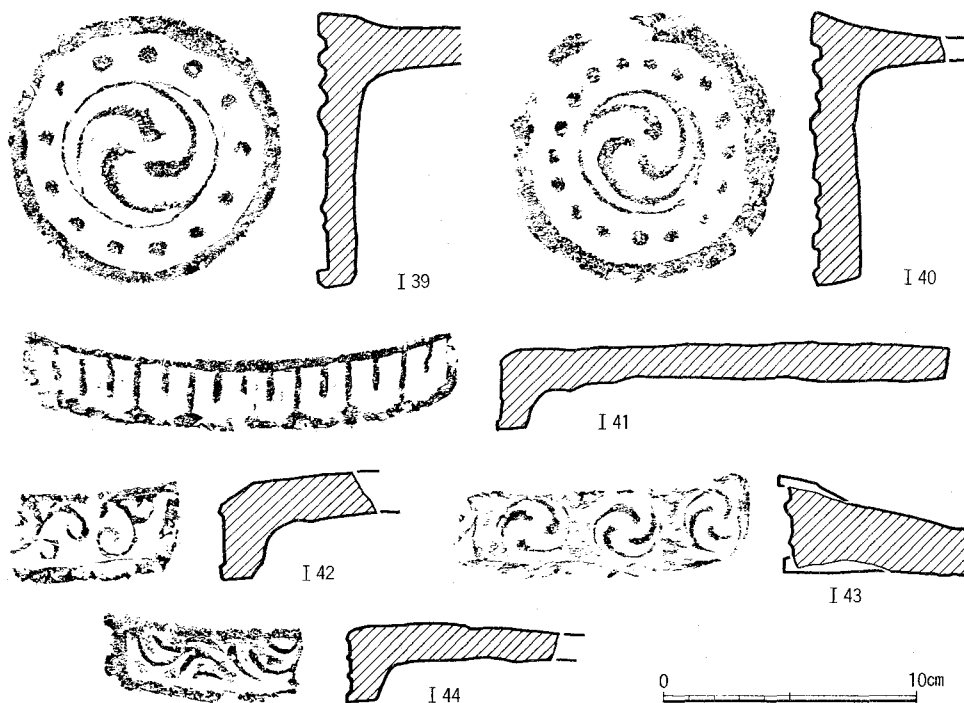


図8 SK51出土軒瓦(I 39・I 43), SE62出土軒瓦(I 40~I 42・I 44) 縮尺1/3

る。このほか、巴文軒丸瓦(I 39)、連巴文軒平瓦(I 43)、フイゴの羽口や元祐通寶、淳化元寶、崇重寧寶などの北宋銭が出土した。

土坑SK58(図6) 東西1m、南北0.5mの土坑で、調査区西辺で検出した。こぶし大の礫と須恵器甕・すり鉢が出土した。すり鉢はSK51出土I 37に類似する。

不定形土坑(図版2-2, 図6) 調査区中央部から南東にかけて、不定形に深く掘った多数の土坑を検出した。これらの土坑は、黄灰色シルト層の上面が浅い部分には分布せず、シルト層を掘込むものはない。また、土坑どうして掘形を深く切合うものがないため、砂取り穴と考えてよいだろう。埋土中から、中世京都I期ごろの土師器、陶磁器が少量出土した。

(3) 弥生時代の遺物

本調査区で弥生時代の遺構は検出していないが、弥生時代の銅鏃、磨製石鏃を各1点発見した(図版5, 図9)。銅鏃(I 45)は調査区南辺の黄褐色土上面で出土した。全長3.8cm、厚さ4mm。柳葉腸抉式で中央がやや厚いが扁平で鋳はない。中央部に径5mmの小孔がある。

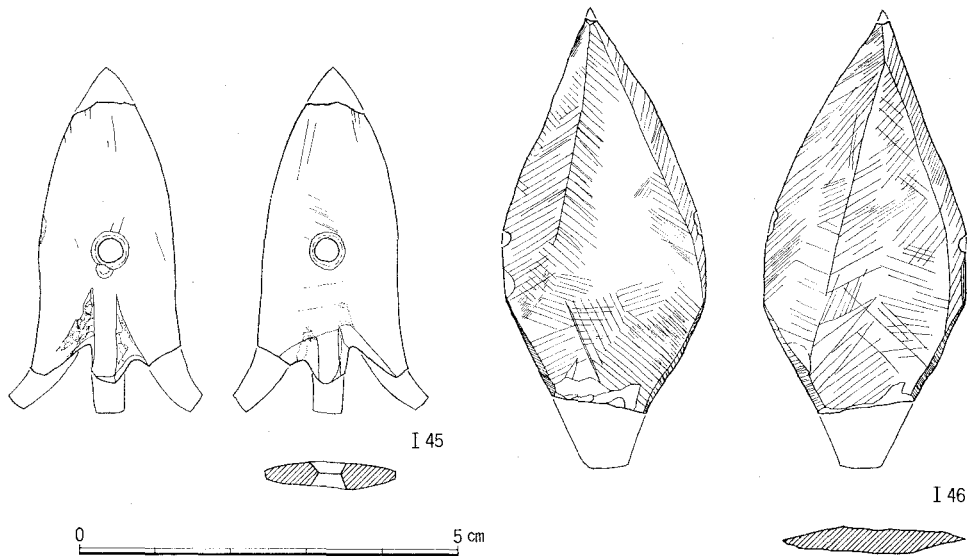


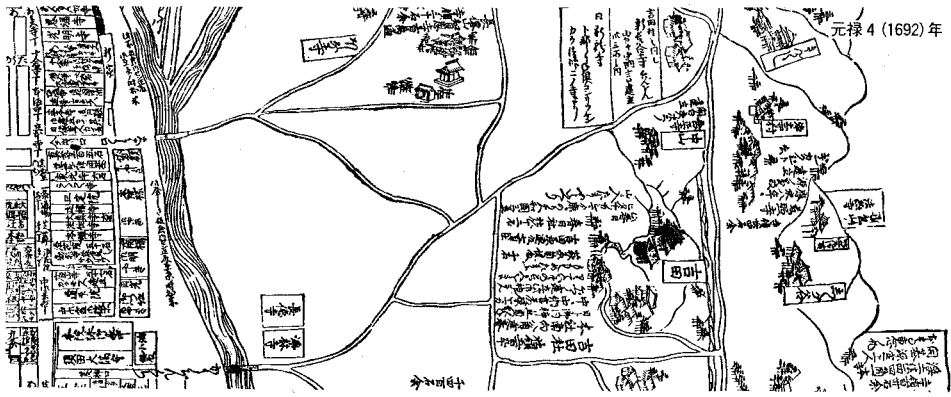
図9 銅鏃, 磨製石鏃 縮尺1/1

鎔范がずれたため断面が対称形をなさず、茎のつけ根の部分に、甲張りを残している。愛知県渥美町中山貝塚出土品に類似するものがある〔紅村59 p.117〕。磨製石鏃(I 46)は調査区西南辺の不定形土坑埋土から出土した。石材は粘板岩で全長5.0cm, 最大幅3.8cm, 厚さ4mm。凸基有茎式で、茎部の下半を欠失している。大阪府枚方市田口山遺跡出土品〔瀬川76 p.18〕, 京都府八幡市金衛門垣内遺跡出土品に、酷似するものがあり、弥生中期の遺物と考えられる。

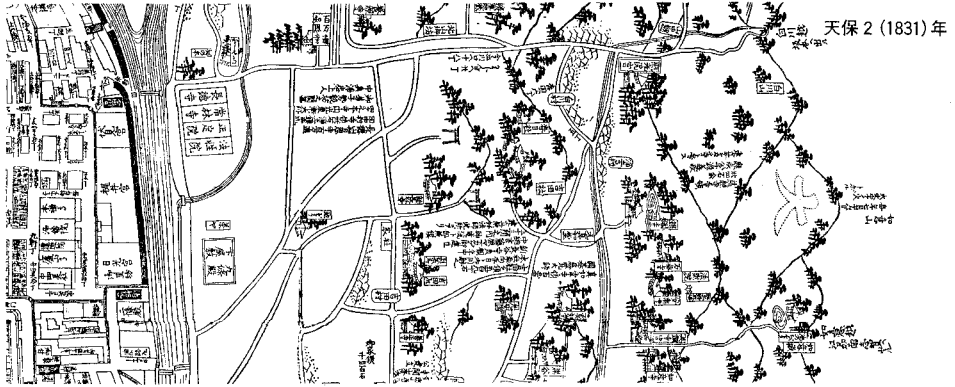
4 小 結

18世紀の白川道の路面には、側溝と轍が存在し、南側に隣接して野壺がならび溝が流れる。溝の南には畑土と考えられる黄褐色土が分布し柵が存在する。19世紀前半の白川道には、次第に轍がみられなくなる。北側に漆喰製の野壺があり、南側の溝との間には、なだらかな傾斜地で土留めの杭が道に平行して並ぶ。溝の南には水田耕土と考えられる暗灰色粘質土がひろがり、畦畔が存在する。以下、こうした景観変遷について、近世の絵図などを参考にしつつ考察をおこなう。

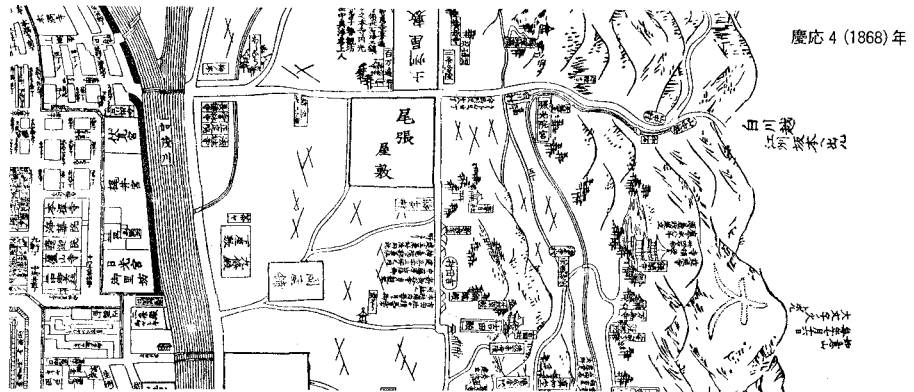
白川道の路面上の轍は、19世紀には次第にみられなくなり、このころに車輛の通行する頻度が低下したことが推定できる。近世絵図で「新撰増補京大絵図」元禄4(1691)年刊と「改正京町絵図細見大成」天保2(1831)年刊を比較すると、後者には今出川口から北白川村に至る道が新たに敷設されていたことがわかる(図10-1・2)。これから、19世紀に至



1 新撰増補京大絵図



2 改正京町絵図細見大成



3 改正京町御絵図細見大成

図10 近世絵図にあらわれた白川道

ると本部構内の白川道が主要な輸送路としての性格を失いつつあったのであり、新道がこれに替っていくという変遷過程を想定できる。また、調査区一帯の白川道沿道の土地利用については、中井家旧蔵「洛中洛外絵図」天明6(1786)年改(京都大学附属図書館蔵)では、南北両面とも畑地となっており、前述の推定と矛盾しない。この畑地には、多数の野壺の存在から瓜、棉のような多肥性の商品作物栽培を想定できる。そして、19世紀には、南面の一帯が水田化したため、野壺は廃棄され、路面が南遷するという変化をたどることができよう。その後、京都大学本部構内西半の地域には、幕末に尾張藩京屋敷が設けられ白川道は寸断されてしまった(図10-3)。そして、明治20(1887)年には、第三高等中学校の敷地となって、のどかな農村の景観は一変したのである。

中世の白川道については、SF2をあげることができるが、この遺構は調査区の南へ続いており、SF1のような明確な路面、轍、側溝を検出しておらず検討を要する。白川道は、京都荒神口から北白川、山中を経て東坂本に至る重要な街道の一部であるが、この街道は、文献によれば、古代以降、山中越、志賀ノ山越、今道越、白川馳道などと呼ばれてきた。とくに、鎌倉幕府成立以降、鎌倉と京都の往還に美濃路が採用され、北陸路の物資を琵琶湖の湖上運搬により坂本に陸揚げし、山中越を経て京都に搬入することが頻繁となっている。こうした山越えの陸運にたずさわったのが、馬借・車借と呼ばれる人々であり、とりわけ「天津坂本の馬借、鳥羽白河の車借」と『庭訓往来』に記されている。また、室町後半の動乱期には、山中越は東海道のバイパス的短捷路として、上洛のための要路とみなされ、安土に居城した信長が、しばしば改修を吉田・白川の郷民たちに命じたことは、『兼見卿記』にみえる⁽¹⁾。このように、中世において白川道は、きわめて重要な役割を果たしていたわけであり、今後の周辺の調査に期すところ大である。

さて、調査区北半では、井戸や掘立柱建物を検出し、瓦も出土しているため、一帯に13世紀の屋敷地があった可能性が高い。調査区北側の71地点(図版1)では、13世紀中葉・後葉の土坑・溝を検出しており[泉・浜崎81 pp.40-41]、これらとの関連が指摘できる。また、調査区南東域にひろがる不定形土坑は、砂取りによるものであるが、こうして採取された白砂(白川砂)は、水無瀬殿上山の新御所造営に際して用いられたことが『明月記』にもみえ⁽²⁾、庭園の白洲^{しろす}などを作る材料として需要の高かったことが推定できる。

〔注〕

- 1 『兼見卿記』天正3(1575)年2月・天正6(1578)年9月の条
- 2 『明月記』建保5(1217)年2月8日の条